

和語成句の漢訳表現

―「はらをきる」と「断腸」―

長沼 英二

はらをきる

「竹取物語」に、哄笑表現として「はらをきる」がある。

〔資料1〕これを聞きて、離れ給ひしものと上は、はらをきりて笑ひ給。
(「竹取物語」／底本：武藤本／はらをきり―古本・大秀本・吉田本・古活字十行本・武田本・内閣文庫本・竹物語 かたはらいたく―正保刊本)

かぐや姫の求婚者の一人、大納言大伴御行は、かぐや姫が結婚の条件に求めた龍の頸の玉を取りに出かけて、それに失敗し、瀕死の状態で帰還する。資料1は、これを知った、屋敷を追い出された妻が笑うさまを表現するものである。この「はらをきる」という表現について、『昭和校註竹取物語』で、漢語「断腸」に基づく成句という見解が示された。

〔資料2〕「腹を切りて」であるが、「腸を断つ」「断腸」といふ漢語にもとづくものであらう。(中略)「断腸」を基としての成句ではないかと想像される。(山田孝雄・山田忠雄・山田俊雄共編『昭和校註竹取物語』武蔵野書院1953)

これ以降、「竹取物語」の多くの注釈書で、この見解が踏襲されることになる。この見解を、かりに、山田学説と呼ぶこ

とにする。なお、資料2の中略部分には、「うつほ物語」をはじめとする、6個の用例を示し、その見解の裏付けとする記述が存在するけれど、それについては、のちに検討するので、今は言及しない。

ところで、「はらをきる」について、山田学説と異なる見解が存在する。

〔資料3〕◎(前略)今も可笑^{ワカシキ}に不堪^{サケキル}わらふを、腹が切ると云は、裂断るやうに思程の事なり。(後略)(田中大秀著『竹取翁物語解』尾張桐園蔵板1782／折口信夫編輯「国文学註釈叢書(五)」名著刊行会(1929)所収)／◎腹をかかえて笑う場合、腸がちぎれるようになるので「切る」といった。(山岸徳平著：學燈文庫『竹取物語』學燈社1955)／◎(前略)今でも胸腹の苦しくてせつなくなるさまに「きりきりと痛む」というと同じではないか。つまり「腹がきりきりと苦しく痛むように苦しがつて笑う」意であらう。(後略)(三谷栄一著『竹取物語評解(改訂版)』有精堂1956)／◎今日いう「腹をかかえて」、或いは「腹の皮のさけるほど」と同じ。(中略)山田博士は「断腸」という漢語を基にした造句かといわれるが、暗合かとも思う。(岡一男著『国文学評釈叢書竹取物語評釈』東京堂1958)

いずれも、大笑いして腹が痛む状態を「きる」と表現したと考えるものである。つまり、和語の成句「はらをきる」は、漢語「断腸」と関わらない、という立場である。しかし、この立場は、山田学説が提出されたのと同じ、1950年代で姿を消すようである。

ところで、漢語「断腸」は、「世説新語」の伝える故事に基づく語で、はらわたがちぎれるほどの、はげしい悲しみを表現する語である。それが、正反対の意味である哄笑を表現する和語の成句となるのか、という疑問を出発点として、本稿の第一段階、山田学説の否定へと進むことにする。

断腸の訓読

山田学説では、「はらをきる」を「「腸を断つ」「断腸」といふ漢語にもとづくもの」「断腸」を基としての成句」と説明する。この表現を、「腸を断つ」という「断腸」を訓読した成句を併記していることから、漢語「断腸」を訓読したもの、あるいは、それから派生したものと、本稿では理解することにする。

さて、まず、平安時代において、「断腸」を「はらをきる」と訓読しえたか、この点を検証する。

資料4は、平安時代における、漢字「腸」の訓読を示したものである。文献名の前の算用数字は、加点の時期を西暦で記したものである。

〔資料4〕「腸」の訓読

◎ハラワタ〔腸〕

790新訳華嚴經音義私記

1100往生要集

1113白氏文集

1155三教指帰(天理図書館蔵)

1250作文大

1250荘子

1250文集

1344遊仙窟

◎ハラワタ〔腸〕

1200大般若經音義

1286大般若經音義

◎ハラ〔腸〕

1134三教指帰注集(大谷大学蔵)

(築島裕編『訓點語彙集成』汲古書院

2007-2009)

漢字「腸」を「ハラワタ」と訓読する文献は、8件あり、「腸」を「ハラワタ」と訓読する文献は、2件あり、合計10件ある。漢字「腸」を「ハラ」と訓読する文献は、大谷大学所蔵の、「三教指帰」の注釈書である、「三教指帰注集」の1件で、加点は、西暦1134年、長承3年である。ほぼ同時期に編纂されたと考えられる、「類聚名義抄」には、「腸」に「ハラ」の訓が見られるけれども、「類聚名義抄」よりやや遅れる、「色葉字類抄」には、「腸」の訓に「ハラ」は見られない。

よって、「腸」を「ハラ」と訓むことは、平安時代末期に一部で行われた、まれな例であったと言えよう。あるいは、「類聚名義抄」の訓は、「三教指帰注集」の訓を拾ったものかもしれない。そこで、竹取物語の時代、すなわち、10世紀に、「腸」を「ハラ」と訓むのは、困難であったと考える。

次に、和語「ハラ」に「腸」、すなわち「ハラワタ」の意味があったのか、その点を検証する。

資料5は、平安時代における、漢字「腹」の訓読を示したものである。

〔資料5〕「腹」の訓読

◎ハラ〔腹〕

790 新訳華嚴經音義私記

810 菩薩善戒經

850 觀弥勒上生兜率天經贊

858 大智度論

1016 南海寄歸内法伝

1045 不空絹索神呪心經

1050 法華文句

1082 大毘盧遮那成仏經疏

1086 日本往生極樂記

1100 往生要集

1113 白氏文集

1114 大毘盧遮那成仏經疏

1136 法華經單字

1142 日本書紀

1145 医心方

1150 日本書紀

1155 三教指歸

1223 俱舍論音義抄

1286 大般若經音義

1386 法華經音訓

1840 法華經山家本裏書

◎ハラワタ〔腹〕

1155 三教指歸(天理図書館蔵)

(資料4前掲書)

「腹」を「ハラ」と訓読する文献は、21件ある。一方、「腹」を「ハラワタ」と訓読するのは、天理図書館所蔵の「三教指歸」の1件で、加点は、西暦1155年、久寿2年である。この訓点資料には、資料4にあるように、「腸」にも「ハラワタ」の訓がある。「腹」を「ハラワタ」と訓む1例は、特異な例と言えるであろう。この1例を確実な例と認めるとしても、「竹取物語」の時代に、和語「ハラ」に「ハラワタ」の意味があったと認めるのは、困難であろう。

資料6は、『訓点語彙集成』に掲載されている、「キル」と訓む漢字を列挙したものである。

〔資料6〕 伐・切・刈・刎・刑・刎・刺・剌・剝・削・割・剔・剗・剪・割・剗・害・尅・戢・截・戮・折・扱・擻・攢・斫・斫倒・斬・斫・断・析・桀・為・破・籤・罰・剪・裁・誅・鱗・鉞・鉞・鉞・鐻・鑽・闔・除・髡(掲出順)(資料4前掲書)

ここに「断」があるので、資料4から資料6までにしたがえば、「竹取物語」の時代に、「断腸」を「はらわたをきる」と訓読することは、可能である。しかし、「はらわたをきる」と訓読することは、困難であったと言えよう。

さらに、「断腸」は、「はらわたをたつ」と訓読されたと推測しうる訓読例が存在する。資料7である。

〔資料7〕 もののみあはれるに、「中に就いてははらわたたゆるは秋の天」といふ事を、いとしのびやかに誦じつゝみ給へり。(「源氏物語」蜻蛉／底本：青表紙本(大島本)／河内本(七毫源氏・鳳来寺本) —はらわたを 別本(陽明家本) —はらわたのたゆるは)

これは、薫が、白居易の七言絶句「暮立」の結句「就中腸断是秋天」を朗詠したもので、「腸断」を「はらわたたゆる」と訓読しているのである。

これから類推すれば、そして、さきの検討を考え合わせれば、「断腸」は、「はらわたをたつ」と訓読した、と断じてよいであろう。よって、山田学説には、正当な根拠がないと結論づける¹⁾。

3種の表現

さて、本稿の第二段階に進もう。

資料8から資料13までは、『昭和校注 竹取物語』で指摘された表現である。他の文献などから検索した、これらと同じ、あるいは類似した表現を、資料14から資料19までとする²⁾。

[資料8] 中納言「さて、いかで昨夜は、ひと度は、雲を穿ちて空に上りし。このぬしこそは、わが世の末の博士とは思ひつれ。それすら、さるけをまいりて、惑ふまで読みののしらせたまひしかども、はらわたのたえしかば、御声の限りをこそ聞きはべりしか。文字一つも覚えぬは。すべて君は、涼をぞ惑はしたまふ。琴弾きたまひては、裸、鶴脛にて走らせたまひて、殿上まで笑はせたてまつりたまふ³⁾」。(「うつほ物語」蔵開中)

[資料9] 都猿楽之態・嗚呼之詞、莫不斷腸解頤者也。(「新猿楽記」／底本：康永本／古抄本・陽明文庫本・宮内庁書陵部蔵本一腹)

[資料10] いたく笑て、とゞまらんとすれどもかなはず。腹のわた、切るゝ心地して、死ぬべくおぼえければ、涙をこぼし、(「宇治拾遺物語」下185)

[資料11] 管中に平蛛のありけるが、喉にのみ入れられにけり。むせては、つきまどひける程に、主上・群臣もわらひ給て、腸を断けり。(「古今著聞集」6-16)

[資料12] 次第取ル僧共、腹ヲ切テゾ咲ひ喟ケル。(「今昔物語集」28-19)

[資料13] あにをとゝ三人、この次第をかたりたるにぞ、其座の人〃、はらをきりてわらひあひたりける。(「続古事談」2-49)

[資料14] 始発艷言、後及交接、都人士女之見、莫不解頤断腸、軽々之甚也、(「雲州往来」巻上19／新校群書類従本一腸／句読は私見による)

[資料15] 叙人十余輩皆以失礼、或不賜位記拜、或取位記不同列立、万人断腸、(「中右記」嘉保1年(1094)1月7日)

[資料16] 被催御酒勅使、左宰相中将家政〔件家政先立内弁後指笏、此勅使不可指笏、在座人々入咲壺、〕、進南實子敷南第三間、〔衆人又弥以断腸、自本至愚之人已迷作法、〕(「中右記」嘉承1年(1106)1月7日)

[資料17] 勸学院小学士頭弁申次云々、左大臣問父祖名、然而各不称之云々、又拜舞之間、万人切腹皮云々、(「愚昧記」承安1年(1171)1月3日)

[資料18] 今日攤之間、親信卿擲筭之後、不拔笏、雖人警示猶不得心、仍可拔笏之由問白被示、周章乍立拔之、人々解頤、自又以切腹歟、(「玉葉」治承2年(1178)11月20日)

[資料19] 楽、次地久、此間各於庭中肩脱、而少将俊通脱半臂、只欄許垂之、此興無双、衆人断腸、(「山槐記」仁平2年(1152)3月1日)

「はらをきる」という成句が、「断腸」から派生したものではない、という前提に立つと、資料8から資料19までの12個の表現は、「はらをきる」系統の表現と「断腸」系統の表現と両者の混淆系統の表現

とに、三分できる。これを年代順に並べたものが、資料20である。文献名の前にある、まる囲み数字は、資料番号である。

〔資料20〕

「はらをきる」系統

- ①竹取物語(900?)
- ⑫今昔物語集(1120?)
- ⑰愚昧記(1171)
- ⑱玉葉(1178)
- ⑬続古事談(1219?)

「断腸」系統

- ⑨新猿楽記(1050?)
- ⑭雲州往来(1050?)
- ⑮中右記(1094)
- ⑯中右記(1106)
- ⑲山槐記(1152)
- ⑩古今著聞集(1254)

混淆系統

- ⑩宇治拾遺物語(1221?)

11世紀半ば頃から、「断腸」が、変体漢文体の文章において、哄笑の表現として、登場したことがわかる。また、「断腸」系統においては、当然であるが、「はらをきる」系統も、和語表現にしろ、漢字表現にしろ、男性の手になる文献に出現している。つまり、「はらをきる」は、男性のことばであったのである。だから、女性の手になる、王朝仮名文学に見られないのである。

資料の検討

ここで、資料8から資料19までを、一瞥しておく。

資料8の「うつほ物語」は、もっとも時期の早いもので、「断腸」の訓読表現であるが、哄笑の表現に用いられたものではない。これは、藤原仲忠の講書の声を聞

いた、中納言源涼が、自身の感動の深さを表現するものである。この理解は、「すべて君は、涼をぞ惑はしたまふ」ということばによって、支持される。「断腸」や「腸断」、あるいは、その訓読表現が、はななだしい悲しみの表現ではなく、より幅広く、深い感動を表わす表現として用いられているのである。したがって、資料8を、哄笑の表現として用いた例として指摘するのは、適切でない。

資料9は、「断腸」を哄笑の意で用いる、初出例である。これは、猿楽の仕草やばかばかしい言葉が、見る者を大笑いさせるというものである。「新猿楽記」は、藤原明衡の作とされる。明衡は、平安時代の漢学者で、文章博士、「本朝文粹」の編者である。「新猿楽記」の成立時期は、明らかではないが、11世紀半ば頃と考えてよいようである。これによく似た例が、同じく、藤原明衡の作とされる「雲州往来」にも指摘できる。それが資料14である。これも、猿楽の猥雑な仕草が、見る者を大笑いさせるというものである。「雲州往来」の成立時期も明らかでないが、11世紀半ば頃と考えてよいようである。いずれの例も、大笑いするさまを表現する「解頤」という漢語を伴っているので、笑いの表現であることに疑義の介入する余地はない。

資料10は、混淆系統「はらのわた切る」の例で、「いたく笑て、とゞまらんとすれどもかなはず」とある。「はらをきる」と「腸断」との混淆で、「腸断」の語順に従ったため、「切る」は、自動詞となっている。

資料11は、「断腸」系統の例で、「主上・群臣もわらひ給て」とある。

資料12は、「はらをきる」系統の例で、

「咲ヒ嗤ケル」とある。

資料13も「はらをきる」系統の例で、「わらひあひたりける」とある。

以上、資料9から資料13までと資料14とが、哄笑を表現するものであることは、確実である。

資料14については、既述した。

資料15と資料16の「中右記」は、右大臣藤原宗忠の日記である。

資料15は、位記を賜る際の作法を10人以上が間違えたことを、みな「断腸」したというもので、哄笑の表現である。

資料16は、「至愚之人」と評される、御酒勅使、左宰相家政の作法の誤りを、みな「断腸」したというものである。「弥以」「在座人々入咲壺」といった表現から、哄笑の表現であることは、確実である。

資料17の「愚昧記」は、左大臣三条実房の日記である。「切腹皮」という「はらをきる」系統の表現が、高倉天皇元服の記事に見られる。記述が簡略なので、拝舞のときに、なにがあったのか明らかでないが、哄笑を表現したものと考えてよいであろう。

資料18の「玉葉」は、太政大臣九条兼実の日記である。親信卿の失態を見た人々が「解頤」し、「切腹」したという。この「切腹」は、「はらをきる」を漢字表記したものと考えてよいであろう。

資料19の「山槐記」は、内大臣藤原忠親の日記である。少将俊通が半臂を脱ぎ、欄だけを垂らした姿に、みな「断腸」したというもので、哄笑を表現するものである。

以上のように、「はらをきる」も、「断腸」も、笑いの表現として用いられたことが

わかる。すると、もともと、哄笑を表現する成句であった「はらをきる」は、当然として、漢語「断腸」が正反対の意味で用いられたのは、なぜであろうか。

断腸の変質

ここで、資料8に戻る。これの「はらわたのたゆ」は、腸がちぎれるほどの悲しみを表現するものではなく、深い感動を表現するものであった。「断腸」あるいは「腸断」をこのような意味で用いることは、すでに中国で始まっていたらしい。そういった指摘がある。

[資料21] (前略)「断腸」は、腸がちぎれるほど悲しいと解するのが普通であるが、「断腸」と「断魂」とは略同じで、もう少し軽く、「心を痛める、もの悲しい、口惜しい」などという程度の表現に使われることが多い。(猪口篤志著：新釈漢文大系『日本漢詩(上)』明治書院1972)

資料21は、菅原道真の漢詩「九月十日」の承句にある「断腸」に対する語釈である。これに類似した例は、道真の他の漢詩にも指摘しうる、資料22と資料23と資料24とである。

[資料22] 千悶消亡千日醉／百愁安慰百花春／一生不見三秋月／天下応無腸断人(「菅家文草」195「秋天月」)

[資料23] 一種薔薇架／芳花次第開／色追膏雨染／香趁景風来／数動詩人筆／頻傾醉客杯／愛看腸欲断／日落不言廻(「菅家文草」403「薔薇」)

[資料24] 栄啓後身吏部王／七条糸上百愁忘／酒酣莫奏蕭々曲／峡水松風慙断腸(「菅家後集」474「感吏部王弹琴、応制」)

資料22は、千の悩みは、千日の酔いで消え、百の愁えは、百花の咲く春で慰められるが、秋の月を見れば、すべての人の「腸が断」たれる、といった内容である。資料23の第7句は、バラを觀賞しながら、酒宴を開き、花をつくづくと見ると、その美しさに「腸を断ちそう」で、日が暮れるまで、帰ると言い出す者がいない、といった内容である。資料24は、吏部王本康親王の琴の演奏は、百の愁えを忘れさせるが、酒宴のたけなわで、本康親王の演奏する、ものさびしい曲を聴くと、峡谷を流れる水音、松を渡る風の音のようで、「断腸」するといった内容である。

これらの例を見ると、「断腸」は、「心を痛める、もの悲しい、口惜しい」といった、悲しみを中心とする感情を表現するだけでなく、「じみじみと心にしみわたる」といった、深い感動を表現する語として用いられていると、判断されるのである。つまり、「断腸」は、悲しみの感情にかぎらず、幅広く「あはれ」や「をかし」に相当する感情を表現する語として、王朝貴族に理解されていたと考えてよいであろう。

さて、「断腸」を哄笑の表現として用いる初出は、資料9の「新猿楽記」と資料14の「雲州往来」とであった。両者とも変体漢文体の文章である。当然のことながら、変体漢文は、漢字で書かれる。したがって、和語を用いる場合は、漢字を当てて表記する。たとえば、変体漢文に見られる、「隠居」「蟄居」「籠居」といった語が、和語の複合動詞「こもりゐる」を漢字表記したものであることを、指摘するものがある⁴⁾。資料17と資料18とは、同様の例、すなわち、「はらのかををきる」「は

らをきる」に漢字を当てて、表記した例と認められる。

しかし、「はらをきる」に「断腸」という漢字を当てえないことは、先述した通りである。そこで、哄笑の表現としての「断腸」は、和語の成句「はらをきる」の漢字表記に、漢語を借用したものと考え。つまり、和語の成句「はらをきる」と漢語「断腸」とは、表現が類似しており、しかも、「断腸」の意味範囲が広がっていて、深い、あるいは、はげしい情動を表現しえたことから、漢語「断腸」を「はらをきる」の漢訳表現として利用したと考えるのである⁵⁾。変体漢文において、尊敬の助動詞の「る／らる」に、受身の助字「被」を用いるのと、同様の発想と言えよう。

明衡の創案

さて、「はらをきる」の漢訳表現に「断腸」を利用する——これを試みたのが、「新猿楽記」や「雲州往来」の作者である、藤原明衡ではなかったかと推測する。資料9と資料14とは、ともに、大笑いする意味の「解頤」という漢語を併用している。これは、ここで用いる「断腸」が、深い感動を意味するものではなく、笑いの表現、すなわち「はらをきる」の意であることを、示すために添えられたと考える。それは、漢語「解頤」を伴わない「断腸」の例が、「雲州往来」に1例あるからである。

〔資料25〕近嘗罷向小野辺、有荒蕪之蓬屋、扣駕孰視庭前、紅梅開敷、独立開柴戸至其所、青苔鋪砌、小松当窓、蕭索之景頗動中心、詳問其主、前朝之名物也、芳談之間、日景漸暮、所陳旧事足断腸矣、(後略)（「雲州往来」

巻中20／新校群書類従本一腸／句
読は私見による)

資料25は、洛北、小野の里を訪ね、荒れ果てた蓬屋の主人と語らい、昔話に「断腸」したというものである。これは、資料22から資料24までと同様で、深い感動を表現するものである。このような「断腸」と区別するために、漢語「解頤」を、「はらをきる」の意で用いる「断腸」に併せて用いている、と考えるのである。そうしなければ、資料9と資料14とで用いる「断腸」の意が、正しく理解されない可能性があったから、とも言えよう。ここに、「断腸」を「はらをきる」の漢訳表現に利用したのは、藤原明衡の創案によると考える理由がある。

そして、この表現を踏襲したのが「中右記」を残した藤原宗忠である⁶⁾。宗忠は、西暦1062年の生まれで、明衡は、1066年に没したから、二人に直接的な接触があったとしても、ここでそれを考慮する必要はないであろう。

しかし、宗忠は、明衡に関心があったのではないかと推測する事実が存在するのである。

資料26は、「中右記」の藤原敦基の卒去の記事である。

〔資料26〕又上野前司藤原敦基朝臣卒去〔年六十一、位正四位下〕、故明衡長男也、(中略)天下属文之人莫非弟子、文武之道共以陵遲歟(「中右記」嘉承1年(1106)1月7日)

敦基は、明衡の長男である。この記事では、明衡の名を挙げ、中略部分で、その経歴を略記して、最後に、世の中の文章家で、敦基の弟子でない者はない、敦基の死で、文武の道は、次第に衰えていく

のではないかと嘆く。そして、敦基の名は、「中右記」に39回登場する。宗忠と密接な関係にあったことは、確実で、その父明衡の著作を、宗忠が学んでいたことは、十分にありうることであろう。

さて、「断腸」を「はらをきる」の漢訳表現に用いるのは、宗忠以降、「山槐記」に1例、その訓読表現が「古今著聞集」に1例見られる。この表現がいつの時代まで受け継がれたのかは、今後の課題としたい。

一方、「はらをきる」にそのまま漢字を当て、漢文法の語順にしたがった「切腹」は、武家勢力の拡大によって、文字通りの「切腹」、すなわち「はらきり」の意に取って代わられ、消滅するようである。勿論、哄笑を表現する和語の成句「はらをきる」も、同様の理由で、姿を消すようである。

以上を総括すれば、哄笑を表現する、和語の成句「はらをきる」は、漢語「断腸」と関わりなく存在したが、武士の台頭によって消滅した、一方、藤原明衡によって、「断腸」が「はらをきる」の漢訳表現として、変体漢文の文章を中心に使用され、藤原宗忠らによって継承された、ということになる。

注

- 1)「はらをきる」の「きる」は、資料6にある「鑽」の意ではないかと予想する。この漢字は、「きりもみする」の意味を持つ。大笑いして腹が痛くなるさまを、「きりで穴を開けられるような痛み」で喩えたと考えるのである。
- 2) 古記録の検索には、東京大学史料編纂所の「古記録フルテキストデータベース」

ス」を利用した。なお、検討対象は、西暦1200年までのものとした。

- 3) この本文に続けて、以下の本文がある。

大将「たちやすき御腹にこそあれ。
今も聞いたまひては、え仕うまつら
じや」。

河野多麻校注・日本古典文学大系『宇津保物語』(岩波書店1961)と原田芳起校注・角川文庫『宇津保物語』(角川書店1969)と室城秀之校注『うつほ物語 全』(おうふう1995)と新編日本古典文学全集『うつほ物語』(小学館2001)とは、この「たち」に「断」を当てるが、宮田和一郎校注・日本古典全書『宇津保物語』(朝日新聞社1951)のように、「立」を当てるべきである。ここは、涼と仲忠との戯れた会話である。涼が、仲忠の弾琴に感動して、殿上で醜態をさらしたことを語り、仲忠のせいにして責めたことを、立腹しやすいと、仲忠がからかったのである。

- 4) 長沼英二「変体漢文語と和文語との相互流入―「執申／とりまうす」と「隠居・蟄居・籠居／こもりゐる」―」『記念論集 松籟 一王朝の文学と表現一』記念論集『松籟』編集委員会2005
- 5) 変体漢文体の文章における、哄笑の意の「断腸」において、語順を逆にした「腸断」の形が見いだしがたいのも、これが理由であろう。「はらをきる」は、存在するが、「はらきらる」は、存在しないからである。もし、「断腸」から「はらをきる」が派生したのであれば、同じ漢語「腸断」を基にした「はらきらる」という成句もありえたはずであるが、それを見いだしがたいことも、「はら

をきる」が漢語「断腸」と関わりがないことの傍証となるのではあるまいか。

- 6) 「中右記」に、「断腸」は、他に3個あるが、これらは、笑いの表現でない。

引用本文

竹取物語 阪倉篤義校訂：岩波文庫『竹取物語』岩波書店1970

源氏物語 柳井滋・室伏信助・大朝雄二
鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎
校注：新日本古典文学大系『源氏物語
(五)』岩波書店1997

うつほ物語 中野幸一校注・訳：新編日
本古典文学全集『うつほ物語(2)』小学
館2001

新猿楽記 川口久雄訳注：東洋文庫『新
猿楽記』平凡社1983

宇治拾遺物語 三木紀人・浅見和彦・中
村義雄・小内一明校注：新日本古典文
学大系『宇治拾遺物語 古本説話集』岩
波書店1990

古今著聞集 中島悦次校注：角川文庫
『古今著聞集(上巻)』角川書店1975

今昔物語集 森正人校注：新日本古典
文学大系『今昔物語集(五)』岩波書店
1996

続古事談 川端善明・荒木浩校注：新日
本古典文学大系『古事談 続古事談』岩
波書店2005

雲州往来 三保忠夫・三保サト子編著
『雲州往来享禄本研究と索引本文・研
究篇』和泉書院1982

中右記 大日本古記録『中右記(二)』岩
波書店1996・『中右記(六)』2008

愚昧記 大日本古記録『愚昧記(上)』岩
波書店2010

玉葉 『玉葉(第二巻)』国書刊行会1906

山槐記 増補史料大成『山槐記(一)』臨
川書店 1975
菅家文草・菅家後集 川口久雄校注：日
本古典文学大系『菅家文草 菅家後集』
岩波書店 1966

付記

本稿は、2014年6月1日に、相模女子
大学で開催された、第51回表現学会全国
大会研究発表会において、同題目で発表
したものを、まとめたものである。

(共立女子大学非常勤講師)

平成 25 年度 表現研究関係文献目録 (補遺)

＊本誌、第99号に掲載すべき文献目録を誤って、3名の学会員のご業績と1名の学会員
の発表月に記載漏れが生じました。お詫びして下記に掲載いたします。(前事務局長
船所)

増地 ひとみ

- 2月 「Eメールにおける文字種の選択—非標準的な表記の背後に働く語用論的要
素—」『待遇コミュニケーション研究』 第10号 pp.120-136
3月 「テレビ番組の文字情報における文字種の選択—番組のジャンルと語用論的
要素に注目して—」『早稲田日本語研究』 第22号 pp.24-35

加古 有子

- 12月 『源氏物語』の文学的敬語の研究—「若紫」巻の考察を中心に—,「解釈」,第59巻,
第11・12月号,通巻675集,解釈学会

茗荷 円

- 1月 「近代における女性書簡文の変遷—文体と結語を焦点として—」『共立女子大
学文芸学部紀要』第59集

マジュール ポリーヌ

- 3月 円知文子の幻想文学—その語りの特徴について—,「教育実践学論集」, 第14
号, 79-87頁